



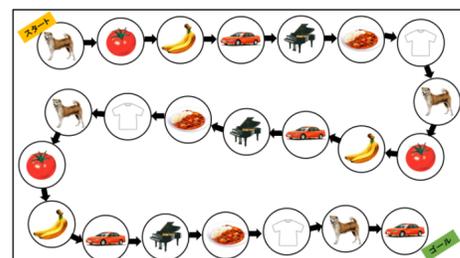
おぎはら耳鼻咽喉科の言語聴覚士(ST)が月1回発行する、カスタネット通信の第9号です。毎日寒い日が続いていますね。10数年前の通勤時にはモコモコブーツと耳あてがないと、つま先と耳が感覚が無くなるほどジンジン痛くなった、という記憶があります。でもこの数年はスニーカーで平気なのです。じわじわ温暖化が進んでいるのでしょうか。

## カテゴリー

今月号は、ことばの発達の促進のためにSTが行う課題のお話しです。STはお子さんのことばの発達に合わせ、様々な課題を用意します。スプーン・コップといった身の回りの物の名前、洗う・寝る・食べるといった日常生活に密着した動作語、大小や色、などについてです。これらの課題をおままごとや絵本、パズルや絵カードなど様々な教材を用いて行います。数ある課題・教材の中で今回取り上げるのは“カテゴリー”です。

以下にカテゴリーの課題の例を挙げました。

- 動物、野菜、乗物などのミニチュアやカードをそれぞれの仲間ごとに分ける
- 動物の仲間や野菜の仲間に何があるかを考える
- 複数の物品の共通点が何かを考えてことばで説明する
- 共通点ではなく仲間はずれを探す



↑カテゴリーのすごろく

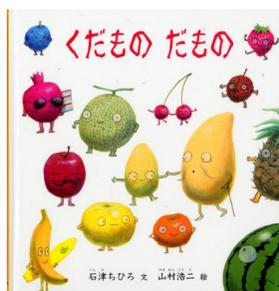
仲間分けの段階では、動物・野菜といったカテゴリーの名前を知らなくても、絵を見て分けたり、何種類かパズルを机に出すと乗物のパズルだけ選ぶお子さんがいたりします。小さい頃からカテゴリー化の概念が育っているのでしょうか。カテゴリーを課題として取り入れながら、私は時としてその意義はなんだろうと考えます。身の回りを見ると、スーパーの商品の陳列、図書館の本、デパートの売り場、筆筒の中、パソコンのフォルダなど、仲間分けされているものが多いですね。仲間分けをすると生活に秩序が生まれ機能的なのではないでしょうか。



なぜ急にカテゴリーのはなしを始めたかと言いますと、オギジビ文庫の「追悼 安野光雅さんコーナー」でご紹介した『はじめてであう すうがくの絵本1』の最初の章が「なかまはずれ」なのです。巻末に安野さんは次のように書いています。

「数学というのはMathematicsの訳語ですが、語源的には数学という意味はなく、数量や図形に限定されることもなく、知ること、ものの考え方とでもいうほどの意味だったそうです。」

「仲間はずれ」は少しトゲトゲしたことばでもありますが、共通点がないから排除するのではなく上手くカテゴリー化を利用することで世の中を便利にしていきたいですね。そのために知ること、ものを考えていくことが大事なのだろうと思いました。



↑カテゴリーに注目できる絵本も多いですね



Q：ロングセラーとなる絵本には、どんな特徴があるのでしょうか。

A：ロングセラーに共通する要素をパターン化するのは、それだけで本が一冊書けるほどの難題です。逆に言えば、この正解がわかってしまったら、絵本はこんなに次から次へと新作が生まれなくなるのではないのでしょうか。その上で敢えて言えることとすれば、楽しい、びっくり、悲しい、嬉しい、美味しいなど全て含めて、子どもたちの感情がちゃんと動いているということです。そしてその感情を動かすために重要なのが、ことばと絵がしっかりと助け合っている絵本であることです。感情を動かすからには相応の表現が必要です。楽しいには楽しい、嬉しいには嬉しい、怖いには怖い表現です。怖い存在として登場する熊がかわいいと、その絵本を読んでも怖いという感情体験はできず、怖いという設定やストーリーをなぞるだけになってしまいます。そういう絵本は、実際にその時代、その時に子どもの感情を動かしていないので、結果的にロングセラーにはならないと思います。

確かに！こぶたやヤギを食べてしまうオオカミの表情は怖く、文章も今ある絵本に比べると表現が直接的で怖いな、と思いました。皆さんもぜひ確認してみてください。

## 冬芽を探しに



なかなか自由に出歩けないご時世ですね。でも休日にずっと家の中に閉じこもっているのも不健康なので、相模緑道緑地、通称緑道に行ってきました。目的は「冬芽探し」です。なぜ急に冬芽を探したくなったかという、「ふゆめがっしょうだん(福音館書店)」を読み、自分でもコアアヤサイみたいな顔をした冬芽を見つけてみたい！と思ったからです。



冬芽の形を調べることで樹木の種類が分かるそうですが、植物には興味がなかったため、何の木か全く分からないし、はじめは冬芽自体をなかなか見つけられませんでした。目が慣れてくるとあちこちに冬芽を発見でき、楽しくて時間が経つのを忘れてしまいそうでした。カラカラに乾燥して、一見枯れてしまっているような木に冬芽を見つけられるとちょっと感動です。その中には葉や花になるものが小さくたたまれて春を待っているとのこと。5、6月になったら同じ場所を訪れて、どうなったか確認したいと思います(井上理絵)。

## 古淵をどう書く？



古淵にご縁ができ、実は悩ましいことが生じました。「淵」の字を書くのが苦手なのです。

正しい書き順ならきれいに字が書けると教えられ、真面目に練習した小学生の頃。でもいつの頃からか、新しい漢字は自己流で書くようになりました。その筆頭が「淵」でした。どう書いてもうまく形が取れない。そんな時、クリニックに届いた手書きの住所に実にかっこいい「淵」の字を発見。そこで一念発起、書き順を調べ、書き方の練習をして、だいぶかっこよく書けるようになりました。やはり書き順は大切なのだと納得したのでした。

書き順と言えば「必」は、人生の途中で書き順を意識的に修正して形よく書けるようになった記憶が鮮明です。でも「右」と「左」の最初の2画の書き順はいまだに曖昧ですし、「葛」「瀉」などもうまく書けず適当に筆を運んでいます。身に沁みついた習慣の修正は難しい。学びは最初が肝心、学校はすごい！と、この春、発音の練習を終えて就学を迎えるお子さんたちが学校を楽しみにする様子を思い浮かべながら、改めて思いました(鈴木恵子)。

編集後記：安野光雅さんの絵本がもっと読みたくなりました。来年度の月刊絵本にちょうどあったので、それをお願いしようかと考えています。